



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2020年 2月号

「弱いからこそ強いことがある」

牧師・園長 長村亮介

「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。』力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」(コリントの信徒への手紙二 十二章九節)

「人間は弱いときにこそ強い」という逆説的表現は、私には非常に新鮮に感じられるのです。

スポーツなど、一面的な能力で優劣を決める場合は、強い人間を割り出すのは簡単です。けれども、人間を総合的に見るとき、果たして明確に強いと言える人というのほどれだけいるのか。たいていは、強く見えるだけで、弱さを内包しています。強く見える人ほど、弱さを隠そうとする。そこに弱さが厳然とありますし、たとえいま、本当に強くとも、病気をしたり、年をとったり、愛する者を失ったりすれば、あつという間に弱くなります。強い状態は、仮初のものなんですね。

自らの弱さを自覚するとき、人間は初めて強くなる方法を見出します。パウロはこの辺りを知り抜いていて、強さという仮面をかぶった弱い人間にはなりたくなかったのだと思います。

「人間は弱いのが当たり前で、弱さという一つの資質を与えられているからこそ、強くなるためにどうしようかと考える。弱さは財産であり、幸運である」

そういう考え方を頭の片隅に置いておくだけで、生き方はずいぶん違ってくるはずですよ。

自らの弱さを誇ることで、どんな状況でも喜べるのと、この二つの精神性があれば、かなり厳しい苦難に直面しても、乗り切ることができるかもしれません。

これは簡単なようでいて、なかなかうまくはいきません。しかし、それもまた人間らしくていいんです。もがくうちにやがて、心から「弱さの幸せがある」と実感するときがくるでしょう。」

『幸せは弱さにある』 曾野綾子著

「人間は人生から問いかけられている」と、ナチスのアウシュヴィッツから奇跡の生還をしたヴィクトール・フランクルは言います。しかし翻って考えてみれば、私たちの毎日は「どうしたらいいのか」という現実の連続で、私たちはその人生の問いに否応なく答えなくては生きて行かれません。ただ、それに正解などがあるのかと言うと、それは別で、成功したから正解で失敗したから不正解であったという訳ではないと思うのです。

と言うのは、仮にそれで貧しくなるとしても、誰かに批難されることになるとしても、人間として、自分の生き方としてどうだったのが、そこでは大切なのではないのかと思うのです。もちろん人間は間違ふこともありますし、思った通りに生きられないことは、すべての人に共通です。しかし、そのことに気が付かないで自分は正解を生きていると自負しているとしたら、それは本当の意味では不正解なのです。むしろ自分にも弱さがあり、誤ることもあることを心に留めて生きる時、私たちはそれがたとえ弱々しく頼りないものに見えるとしても、人生からの問いに対しては、しっかりと答えているということになるのではないのでしょうか。

パウロには生涯治らなかつた病がありました。しかし、パウロが伝えた神さまの恵みを、多くの人々が信じたのは、パウロにその病があつたからこそ、彼の言葉に真実を人々が認めたからだと思います。

平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園
2020年 2月号